
 序にかえて

女子栄養大学の発展とともに40年

女子栄養大学教授 佐久間 慶 子

香川栄養学園に40年間奉職させていただき、健康で定年を迎えられることを改めて幸せに感じています。定年ということで最終講義や総説を書く機会もいただき、その長い年月を振り返って自分を見つめ直すよい機会をいただきました。さらに幸せなことは、私の40年は常に新しい時代の幕開けに出会う連続だったことです。あっという間という言葉を度々聞きますが、私にとってあっという間とは言い難い長い年月でした。

たいした志望動機もなく、何となく文系が不得意だったので理系かなという程度でお茶の水女子大学の生物学科の動物学専攻に進学しました。ヒトゲノムも解明された現代では動物学は未解明の最高に魅力的な領域と思います。でも、その時代の私には古めかしい博物学と感じられ不満をもったことが、私の後の人生を決めた第一段階でした。そして生化学が何なのかも良くは知らず、新しく出来たばかりの東大理学部生物化学科の大学院修士課程に入りました。新しいもの好きだったのです。その後の組換えDNA旋風も、日本において最も早くその中心であった癌研究所生化学部において接することが出来ました。現在の会員数15,000名の日本分子生物学会には、会員数600名の第1回からの参加になりました。

女子栄養大学坂戸校舎に採用されたのは、大学院修士課程が創設されたばかりの頃で、環境は離れ小島のようなものでした。夜は都会の明かりから隔離され、漆黒の闇とはこういう所を言うのだろうと思ったことを記憶しています。秋には校庭はススキの原でした。でも中は離れ小島ではなく、熱い場所でした。現在は、時代の流れでしょうか、残念なことにその熱さは失われてしまっています。組織は未成熟で若く、教員も皆、年齢ではなく若く元気いっぱいでした。その元気さをもってアメリカにポストドクトラルフェローとして留学す

る機会もいただき、そこでも日本ではまだ始まっていなかったクロマチンのイン・ビトロの転写という激しい競争の中に未経験のまま飛び込みました。が間もなくその流れが挫折するという経験もしました。しかしその領域の世界の研究者は皆強く、立ち直りは素早いものでした。1970年代当時の生命科学でクロマチンの転写は早すぎたのです。大変嬉しいことに、DNAの解明が終結した2000年代になって当然のこととしてクロマチンの研究が再び興隆し、科学の発展とはこういうことと身をもって実感しました。

これらすべてが1987年に新しいネーミングの分子栄養学研究室を発足させる力となってくれました。そして分子栄養学のテーマとして“乳糖不耐症の遺伝子レベルの解明”を選びました。現在では分子栄養学は栄養大学の必修科目に認めています。

その後大学院は栄養学と保健学の2専攻に発展し、博士課程が新設され、ハード面でも校舎の新築、建てかえが続き、グラフに表せば正の一次関数的に栄養大学は発展しました。研究室委員長として7号館から12号館までの建築に関わらせていただき、特にラットを用いる研究に長く携わってきた私に嬉しかったことは、実験動物の飼育棟の7号館が出来た時です。嬉しくて竣工式の神事の際、神主さんの前でくす玉割りをしてしまいました。そして大学院研究科長としては、一番新しい12号館に大学院専用のスペースが出来たことです。

現在、一次関数の時代は終わり、栄養大学も大学院も内容の充実をかけた外部との真の競争の時代に突入しています。これからの厳しい時代が明らかに予測されますが、良き時代を過ごさせていただいたことに御礼申し上げ、蓄積した実力と自信で絶対に勝ち進んでいただくことを祈念しつつ退場させていただきます。